

よりあいつうしん

25号

よりあいつうしん課

〒814-0104

福岡市城南区別府
7丁目9-22

世代を超えて

ある木曜日、よりあいつうしんを統括管理している村瀬所長が第二よりあいつうしんへ出勤してきた。

村瀬 「こんにちは」
カズコさん 「あら、こんにちは」
カヲルさん 「あら、お久しぶりー！」
カヲルさん 「さあ、こちらへどうぞ」
席を立てて村瀬を席へ案内してくれる。
村瀬 「恐れ入ります」

久しぶりの再会を笑顔で喜ぶ三人。私も広間に馴染みの人が集うことが嬉しくなる。

カヲルさん 「ウフフ。この人は、私の学生時代の恩師なの、すごく長いことお世話になってね」

カズコさんへ紹介される。
カズコさん 「ええ！？恩師ってことは、あなたより年上なの？？」

驚いたような表情で村瀬を見る。

カヲルさん 「口に手をあて、あ、言っちゃまずかったかしら…という表情。」

カズコさん 「え〜どっちが歳上〜？？」
カヲルさん 「私の恩師だからね」
カズコさん 「ええ〜？？」

二人を飛び越え年長者となってしまう村瀬所長。戸惑うような困ったような…。

事実から見ると、カズコさんの驚きは当たり前である。カズコさんは八九歳、カヲルさんは八四歳、村瀬所長は五八歳。

女性に対して申し訳ないが、どう見てもカヲルさんの方が年上、。



カズコさん (写真左) とカヲルさん (写真右)

カヲルさんは、親のことをよりあいつうしんまで一緒に支えてくれた村瀬のことを、心からお世話になった方だと思っていたのだから。しかし、その思い込みが強かったがゆえに、時空を飛び越え学生時代の恩師へと変化してしまっただけ。

村瀬は、カヲルさんの時系列の変化に気づき、

(光栄なことなのだが、恩師だなんてとんでもない…ましてや学生時代の…) と思いつつも、カヲルさんの今ある事実を否定することはできなかった。

また、明らかに年下に見える男性を学生時代の恩師と紹介されたカズコさんの驚きは全うなのだが、真実を伝えてしまうとカヲルさんの顔が立たなくなる。

その場にいた私は、時間軸が微妙にずれたチグハグな再会を喜び合っている三人のやり取りがとても面白かった。

カヲルさんは、自身の母親の介護をよりあいつうしんとともに支えた。一方、カズコさんは、母親に介護が必要になった時、当時ケアマネージャーを担当していた村瀬と一緒に支えた。

二人とも、親の介護を終えた後もよりあいつうしんの支援者として関わり続けてくれ、その関係は二十七年にもなる。

一体、どのような経過を辿れば、こんな風な三人になれるのだろうか。どのようにして途切れることのない関係を続けていくことができたのだろうか。と考えた時に一人のお年寄りが頭に浮かんだ。

百一歳のノブコさんだ。



ノブコさん

ノブコさんのご主人は第二よりあいつうしんが始まった頃に関わっていたお年寄りだ。もう二十年以上前になるが、職員とともに最後まで支えた。

ノブコさんは一人になってもよりあいつうしんのことを気にかけてくれて、頻りに手作りのヨーグルトを差入れしてくれ、ボランティアで週一回の食事作りに来てくれるようになる。

しかし、歳を重ねていくごとに段々とできなくなることが増えてきた。体調を崩すこともあった。その変化や様子に気づき始めた職員が、ノブコさんを気にかけるようになっていった。

「私もそっちの方に用事があるからついでですよ」

と言いつつ、病院への送迎をする。一緒に銀行に行く。ご主人のお墓参りに付き合う、等々、自然と行動を共にすることが増えた。

今は毎朝電話がかかってくる

「今日も変わりありませんよ。よろしくお願ひいたします」
と挨拶を交わすだけだが、このやり取りは習慣となっている。

ノブコさんとの関係はそのようにして続いている。そして、このような関わりは介護保険を使用している支障ではない。

私は、ノブコさんとのやり取りの始まりを直接知らなければ、今は亡きご主人にお会いしたこともない。だが、ご主人の存在があったからこそ、私とノブコさんとの関係がある。



カズコさんやカヲルさんも同じように親の介護が終わった後も、よりあいつうしんの関わりを持ち続けてくれた。自身が介護をされる側になっても関係が続いてきたのは、お互いがお互いのことを気にかけた交流が二十七年間続いていたからだろう。

お年寄りが感じる「安心」というものは、介護保険を利用するために契約を交わし合うということだけでは感じられない、この三人を見て感じる。

世代が移り変わろうとも、途切れることのない関わりを続けていく。介護サービスと呼ばれるものの外側にこそ、受け継がれてゆくべきものはありそうに気がする。

第二宅老所よりあいつ

緒方 真弘

よりあい劇場 ～病は気から～



絵：宅老所よりあい 小柳 璃加子

「病は気から」

エビデンスベース。「根拠に基づいた」という意味であり、科学的な根拠に基づく臨床判断が必要な医療現場でよく使われる言葉である。御年百歳の三好さんは歌うことが大好きだ。その百歳とは思えぬ澁刺とした歌声は『よりあいの歌姫』と名付けられるほどである。そんな三好さんだが、時々「フラフラする。気分が悪い」と言われることがある。その表情は見るからに具合が悪そうだ。病院で診てもらおう？ベッドで横になる？ある時隣で歌を歌ってみた。するとさつきまでの不調はどこへやら。一緒に歌い始めたではないか。「次なん歌うと？」



かしそれはお年寄りに限ったことではない。人間みんなその心へのアプローチ。そこに科学的な根拠はないが、心が満たされることで体の調子まで良くなることもあるというのは、まぎれもない事実である。

宅老所よりあい 堀 正晴

「由香さんの社会を守る」

若年性アルツハイマー型認知症の由香さんはまだ五十代。娘さんから「母を結婚式に参列させたい。でも難しいだろうと言われている」と相談があった。由香さんはよく歩く。とにかく歩く。一日に二万歩以上歩く。こんなに歩いてきつくないのかな？と感じるが、ゆつくりと座っている時間は短い。もしかすると、きつくてたまらない時もあるのかもしれないが、何かしらの理由で座ることができないのかもしれない。入居した時、どんな風に関係を築いていけるか探り探りの日々の中で、感情豊かで明るく笑う由香さんに職員達は救われた。付き合いを重ねるうちに、由香さんが嫌な時はすぐにわかるようになった。表情は変わり、足音を響かせて歩き、私達を押しやり叩いたりする。



式場は知らない場所でも馴染みのない方ばかり。誰でも緊張する場所。由香さんが嫌な気分にならないように、隣にいたり、離れて様子を見たり、付かず離れずしながら「歩く」をサポートした。

母が娘を祝うために結婚式に参列するというのは、一般的に言えば当たり前のこと。認知症や障がいを抱えたとしても、これまで当たり前であったことを、これから当たり前に行えるよう支えることは、由香さんが歩んできた社会を守ることに繋がる。このように貴重な経験と感動をさせて頂き、由香さんとご家族には感謝しかない。

挙式当日、式場や廊下、披露会場、控室を渡り歩き続けた新婦母を細やかに丁寧な支援していた式場スタッフ。由香さんの「歩く」に温かかった参列者。全員があつた。高の場にしようとする思い一杯だった会場。披露宴会場から帰る時、娘さんから「母に結婚式に出てほしかった。願いが叶いました。母がいてくれるだけで心強かった」と言われた。介護士と看護師の経験がある私が、こんな言葉に触れる機会は今まで一度もなかった。

編集後記

新年明けましておめでとうございます。まだ記憶に新しいサッカー杯。主力が若い世代へと移った日本代表。新しい世代の活躍により、スペイン、ドイツを破るといった歴史的勝利を挙げました。そんな世代の移り変わりがよりあいのでも。親の介護を終えた後、長きに渡り支え者としてよりあいを支えてきて下さった方々が、今、自らの老いと向き合われています。老いても安心して暮らしたい。支える側、支えられる側、どちらの世代が変わっている。でも、繋がりを持ち続ける。事を得られる安心がある。それを忘れる事なく、これからも支援の向上に努めて参りたいと思っております。本年もどうぞよろしくお願いたします。



よりあいの森 石橋 知巳

そして、私は号泣するのを我慢するのが大変だったという話(笑)

宅老所よりあい 堀 正晴